

印度最近の發掘

ジ・エチ・マーシヨール氏述

Archaeological Exploration in India,

1909—10. By S. H. Marshall, C. I. E., M. A.

本年正月號の「王立亞細亞協會雜誌」(The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland, Jan., 1911.)に掲載せられたる主題の如き論文はマーシヨール氏自身の手に行はれたるビーター(Bitter)の發掘の外サリッバーロール(Sairibahrol)西部西藏、ミールブル・カース(Mirpur Khas)等、印度及び其の邊境の各地に行はれたる探査發見の結果を録せるものにして、最近二年間の印度に於ける考古學的發掘の概況を知り得るのみならず、歴史考古學上將た文化史上頗る興味あるものあれば、今其の梗概を左に紹介すべし。

假定せる等は支那古代の研究者にとりては稍牽強附會に過ぎたる嫌あり。されど支那數字は予の多年解決せんと欲する問題にして未だ志を得ず。西人側の研究としては漸くウツドルフの論文とラクーペリーの論文(一八三)あるを見るのみ。近き將來に於て予が支那數字の研究を公にせんとする序幕の一つとして茲に西人側の研究の一斑を示せしに過ぎず。讀者之を諒せられんことを。

(後藤朝太郎)

ビーター(Bitter)

ピーターはジューカー河 (Jumna) に臨めるアラハバード市 (Allahabad) の南々西十里許にある一小市にして、歴史上重要な位置を占めたるとなければ、其の古名すら明かならざるなり。加之今回の發掘亦沿ねからずして、僅かに其の一局部を限れるものなるにも拘らず、發見の結果は頗る大なるものありて、印度の考古學に一新生面を開けりといふも過言にあらず。

ピーター市の東南門の傍側、之に入るべき道路の右側に當りて、相並びて立てりし三家の遺跡は發見せられたり。三家中尤も完全にして且時代の古きは余が姑く「商會所」(The House of the Guild)と名づけしものなり。然か名づけし故は、此の建物の床と思ほしき高さの邊より、焼坩の極印の發見せられたるに因る。尤も極印には紀元前三世頃の文字を刻し、家屋は諸種の事情を考察してマウルヤ (Maurya) 朝のものと斷じ得べければ、前者は後者の土臺を築き

し時偶ま土中に埋もれしものなるべし。家屋のプランは頗る簡單にして、中央に矩形の中庭を設け、其の周圍に略ぼ方形なる十二室を排置す。中庭よりする通路は其の一邊に沿うて家屋の兩側に出づるを得べし。此のプランを見れば、古の僧坊に類すること明かにして、後者は蓋し斯る種類の建物に其の範を採れるものならんと思はる。用材は窯製の煉瓦にして、土臺は下層を厚き粘土のタ、キとなし、上層に煉瓦及び陶器の破片を布けり。床は現存せざるも、之を同時代の家屋に徴するに、最下に煉瓦を一かはに並べ、次に厚さ三インチ許の粘土のタ、キを施し、次にコンクリートを以て之を覆へり。當時の瓦の遺存せるもの頗る多く、屋棟に冠せる小尖塔も亦發見せられたり。

House of the Guild は當初建造の後久しきに亘りて存在したりし形跡なく、其一たび毀たれて後更に改築せられたりとも見えず。而して此の家屋の廢亡

が紀元三世紀以前にありしことは、其の頃中庭の内に設けられたる井戸の位置及方向よりして之を察するを得べし。蓋し House of Guild は井戸の設置より遙か以前に毀たれたるにて、之に隣接せる House of Nagadēva の建設と同時にしものゝ如し。そは House of Guild の床面の碎屑中より發見せられたる遺物を檢するに、正しく此の家の毀たれたる時若くは其の後間もなく委棄せられたるものにして、其の時代はスンガ(Sunga)時代に屬し、House of Nagadēva の土臺の中より發見せられたるものと同時代を示せること明かなるに由りて之を知るべし。

發掘の結果、此の建物の中庭及各室の床面より頗る深き地中に埋れたりし遺物は、何れも焼坩の製品にして、前述の極印の外、人形を模したる器物、女人の小像、玩具用の馬車の車輪等なり。最後のものは其の古さに於て六世紀を下らざるべく、他の三品は家屋其のものより古かるべし。又床面上の發見に係

るものゝ中尤も著しきは焼坩の車輪、滑石製の寶珠匣等にして、前者は車輻及び精巧なる花模様を施し、後者は圓形球形の兩種ありて、共にダイヤ盤裂なるが、殊に球形のものは技巧の妙を得たり。而して何れもよくスンガ時代の様式を顯はす。

House of Nagadēva は House of Guild の西北に位し、之と極めて狭小なる路地一條を隔て、互に相隣接せり。是れ即ちナーガデーヴァなる者の住宅及び其の店舗にして、スンガ時代の末期に屬するものゝ如し。住宅のプランは殆んど House of Guild に同じけれども、各室の大きさの劃一ならざると、張出し(veranda)の著しく長さに於て其の相違の存するを見る。店舗は三室ありて之と本宅とを分つに蓋し中庭なりしと思はるゝ空地あり。三室の前面に一段高く設けられたる張出しは、現今普通に印度のバザール(bazaar)にあるものと相似たり。

此の建物の敷地は新古の層相重なりて、其の限界

頗る明かなり。最古の層よりは椶櫚樹の下に立てる女性の像を刻せる模型を得たり。其の古さは紀元前三世紀より早くとも、之より降ることなるべし。

次はマウルヤ時代の層にして、屋壁の一部及び井戸は此の時代に屬す。第三層はナーガデーヴァの基礎に接し、スンカ時代の焼坩小像、鐵器、陶器等數多出てたり。第四層は House of Nāgādēva 創建當時の床上に在りて、カニシカ (Kanishka) 及びフビシカ (Huvishka) の銅貨幣十七個の外クシナ (Kushana) 時代の遺物を數多含めり。介穀の模様を刻せる象牙の極印も亦其一にして、印文に Nāgādēva とあり。是れ即ち此の住宅及び店舗が Nāgādēva なる者の有たりしことを推斷せしむる所以なりとす。之を床上に散亂せる是等の貨幣及び其の他の遺物に徴し、且つ室内庭上に堆積せる爛碎に察するに、ナーガデーヴァの家屋がクシナ時代に或る災變を蒙りて無主のものとなり、其の後荒廢に委せられたること、

之を知るに難からざるなり。然かも此の建物が此に至るまで幾何の年緒を経たりしかに至りては、殆之を決するに由なし。但だ此のビクターの遺址及び其の他の遺跡よりして斷定せらるべき一個の事實は、スンガ朝とクシナ時代とを聯絡する藝術上の時期は、年月の經過甚だ久しからざるべからざるとなりとす。蓋しスンガ朝の藝術は廣く印度の北部及び中央に弘まりて、其の根底を深くし、紀元前一世紀の未造には其の隆盛を致せしことなるべし。然るに今ビクターの建物の遺址を検して截然たる區劃の存するクシナ層に至れば、スンガ式の遺物は其の最も衰凋を示せるものすら之を發見することなし。クシナ朝の年代は史家の疑問とする所なるが、若し紀元前一世紀の中葉に其の創業の時代を置くとせば、如上の事實は如何に之を説明すべきものなるか。勿論印度本來の藝術が突然其の影を潜めたることは、時代の政治上の變動よりして、將たマッラー (Mathura)

藝術を媒介として多大の影響を及ぼしつゝありし健駄羅藝術の傳播よりして、其の因由を論明し得べからんも、然かも廣き範圍に亘りて古代の生活を支配したりし固有の藝術が、歲月の久しきを経ずして、さまで著しく其の形を失へることは、殆んど之を信じ得べくもあらざるなり。果して然らばカニシユカ即位の年代を紀元後七十八年となすの説は、又此の問題を決するに當りて採擇すべきものなるべし。

第五層は、本來の床上三呎を隔つる第二の床ありて之が界をなせり。此の床は紀元後三世紀の末造に作られたるものなるべく、其の上より發見せられたる遺物を見れば、又其の家が廢滅に歸したる時のものにして、決して再建ありし時のものとは思はれず。而して前グプタ朝の時代に起れる此の第二回の廢滅も亦初回の場合に於けるが如く火急の時變に因れりしものゝ如くにして、ビーター市が外敵の襲撃を蒙りたる結果なるべしと思はるゝ形跡あり。そは種々

の飛道具の家屋及び路地の中より發見せられたる、家屋の大部分が焼けたる迹あると、同じ運命に遭へりし佛像さへ數多出てたるにて之を知るべし。又非常に面白きは、獨りナーガデーヴァの家のみならず、其の他の家屋に於て石斧並に其の他の新石器時代 (neolithic) の器具の數多發見せられたることなりとす。發見の層はクシヤナ及び後グプタ時代にして、其の層の時代につきては敢て疑を挾むの餘地なし。然らば此の問題は如何に之を解釋すべきか。ビーター市が外敵の攻撃を受けて荒廢せる後、文化の程度なほ新石器時代にある隣近の蠻族屢々此の市に據り、石器は即ち彼等の留めしものならんと考ふること、蓋し妥當の解釋なるべし。なほ別個の解釋としては、新石器時代の狀態を脱して後數世紀なる民族が祭神の爲めか若くは他の宗教上の目的にて石器を用ゐ居りたりとも考へ得られざるにはあらざれども、斯る場合に於ては石器の種類は多少一樣なる

べしと思はるゝに、發見の石器は其の種類頗る多ければ、此の點よりして後の解釋は不合理なるべし。

たゞそは何れにもせよ、中世期に至るまで印度に於て新石器時代の石器の使用せられしことは其の確證を得たりといふべきなり。

ナーガデーヴァの家屋に隣接して House of the banker Jayasunda あり。時代及び構造全く前者に同じ。時代の層も亦同じくして、スンガ期の層より出でたるものには、焼坩の紀念牌最も著しく、其の彫刻精巧を極め、クシヤナ層即ち第一次の床上よりは種々の陶器小像など出で、第二次の床上に於ては火災の證憑を明かに認むべく、米穀の炭化せるもの夥しく出でたり。又此の最後の層より數多の印章の出でたる中に象牙製のものあり。印文に北グプタ朝の文字にて Śrīhiti Jayasunda とあり。即ち the banker Jayasunda の意なり。

叙上の建物の外ビーター市の古址を發掘して遺物

の發見せられたるもの數多あるが中に、焼坩の人形無慮數百あり。男子も婦人も小供もありて、時代は四世紀より六世紀に亘る。何れも模型に入れて造れるものにて、模型も一二發見せられたり。人形は彩れるあり、又然らざるあり。其彩れるものは赤黄等の單彩を用ふ。又上衣あるもあり、或はなきもあり。其のあるものは紅黃白淡紅等の諸色を以て飾れり。又此の人形は技術の點より離れて之を見るも、グプタ時代の風俗流行を察すべき好個の資料たり。

ビーター市發掘の結果、余は紀元前四世紀以前此の地に煉瓦造の家屋ありしことを思考せり。思ふに煉瓦は是より一世紀以前の頃より使用せられしならんも、煉瓦造の家屋に至りては四世紀以前のものを求むること能はず。余はマウルヤ層より降りて深く此處彼處を試掘せしに、何れも層下數呎に至れば煉瓦の破片なく、たゞ二十呎までの間は堆積物存在して遂に地山に達す。余は固よりこれによりて、紀元

前五世紀以前、煉瓦の使用の印度になかりしことを證せんと欲するには非ず。たゞ思ふに、其の頃ビーターはなほ寒村僻地にして、其の家屋は、今日印度に其の例あるが如き土造のものなりしならんと察せらるゝなり。然るに又余の發掘によれば、其の發掘せられたる市の外壁の一部はマウルヤ朝に至りて初めて煉瓦もて築かれたること明かにせられたり。果して然らばビーターの地は漸次繁華の域に進めるものにて、外壁の築は村落變じて市府となれりし標章なりとせんこと敢て失當の見にはあらざるべし。

又思ふに、實際窯製の煉瓦の使用は紀元前五世紀以前印度に知られざりしことなかるべく、市の防禦としてはパータリプトラ市(Pataliputra)の如く木造の外壁を用ひしならん。ビーター市の地下深く全く煉瓦の存せざるは、チャンドラグプタ(Chandragupta)の居城に關してメガステネス(Megasthenes)の言ふ所に吻合す。されども此の問題たる、なほ多くの市

府につきて其遺址を研究せずんば、未だ以て確定のものとなすべからず。

煉瓦造の家造につきては叙上の如くなりとするも、床を築くにコンクリートを用ふる法は既に紀元前七世紀の頃に知られ、或は粘土に土器の破片を混じて厚き下鋪を築くの別法も亦知られたるを見る、

(此の粘土のタ、キは後世火災に遇ひて其の儘焼坭の一枚板の如くなれり)。旋盤製の陶器は最古の層より出で、其の年代紀元前千二百年を降らざるべく、よく研磨の工を積みて表面黒色の光澤を放てる器物は紀元前七八世紀の層より焼坭の人形と共に現はれたり。

サーリパロール(Sahrpalol)

千九百七年スプーナ博士(Dr. Spooner)がサーリパロールに得たりし健駄羅彫刻は其の數夥しかりしが。本年(千九百十年)に至りて博士は又同市の最大なる塚の發掘に力を用ひ、同じく多大の結果を收め

たり。發掘の彫刻凡て二百餘點に上れる中、其の最

も著しきは佛陀の巨像二軀にして、身長共に九呎、

右手の缺けたるさへの其儘發見せられ、既往の發見に係る健駄羅式の巨像の中無比の完全なるものなり。之と相並べて稱すべきものには高さ六呎許の彫像あり。スプーナー博士の助手ワシ・ウド・デン(Washindin)は之を以て或る王族の男子を寫せるものなるべしと考へたれども、余は其の外貌及び臂周りの廣さより察して、ヴェーゲル博士(Vogel)が女人の像なりとなせるに賛せんとす。全體端嚴にして又其の優麗なる、健駄羅彫刻中罕に見る所、其の指輪の如き、最も精巧を極めたり。又彫像の頭部の發見されたるあり。四肢並に軀幹を缺き、外粗形なれども、決して凡庸の作にあらず。額秀て鼻尖り、唇緊り、頤の結べるより察すれば蓋し高僧の刻像なるべし。其の他佛像彫刻なほ甚だ多ければ、佛像の研究者はスプーナー氏の之を公にするを鶴首することとなるべし。

西部西藏

カシュミール及び西部西藏の發掘は西々藏通の開え高き فرانケ氏 (A. H. Francke.) の手に行はれり。西部西藏發見のものにて其の時代最も古く、且つ年代の明かなるは、カラツ (Khalatze) より出てたるブラーミー (Brahmi) 文字及びカローシュチー (Kharoshthi) 文字の刻文數種なり。其の中最も古きは紀元前二三世紀に溯ることを得べく、さばかり遠き古代に於て印度の影響が斯る山地に及べることを立證し得べき貴重ものなり。但し此の記録を残せる人民がギルジット (Giltis) より來れるダルド (Dardic) なるか、將たカシュミールに使せる佛徒なるかはなほ未決の問題なり。此の他レー (Leh) 地方にては相聯れる古墳の發掘されたるあり。遺骨を藏めたる壺多く之より出て、青銅、鐵、黄金の裝飾亦出てり。其の頭蓋を検するに人種學上ドリコセファリッ

ク (Dolicho-sephalie) に屬す。蓋しダルドの酋長の一家を葬れるものなるべく、隋書に紀元六世紀の頃東女國に行はれたりと見えたる特殊の埋葬法は即ちこれなるべし。即ち隋書女國の條に「貴人死剝取皮、以金屑和骨肉、置於瓶內而埋之、經一年、又以其皮內於鐵器埋之」といひ、唐書東女の條に「貴人死剝藏其皮肉骨壺中、糝金屑瘞之、王之葬殉死至數十人」といへり。(○原文東女國の埋葬法云々、隋書の記事云々といひて而かも唐書の文を掲ぐ、今兩書を併舉す。)フランケ氏考ふらく、一個の墓所より數多の頭骨の發見せられたる事情は此の文によりて之を説明するを得べしと。

此の他佛教傳來以前の西藏史に關するものにては、其の本來の宗教と關係ある文書彫刻、繪畫等發見せられ、更に降れる時代に屬するものにては、アチシヤ (Atisha) の實在を確定すべき記録もあらはれたり。アチシヤは西藏の古傳に名高き人物なれども、其の史的實在は疑がはれしに、フランケ氏の發見せ

るフレスコ及び其の他の古物によれば、彼れが西部西藏藝術最盛の時期なる十一世紀に榮えし人なるを知るなり。而して此の時代の繪畫と彫刻とは、フレスコに、肖像畫に、風俗畫に、木彫に、美術上稱讚すべきもの甚だ多く、又其の作品には總じて印度の精神著しく現はれ居ることなれば、彼のカラツエ發見の刻文とも連關して、西部西藏の古今を通じて其の文教藝術に及ぼし、印度の影響の大なりしことは深き注意を値す。フランケ氏の發見にかゝる繪畫は更に降りてモンゴル帝國の時代に及べり。其のフレスコを見れば又モンゴルの影響著しく、描寫の事物は一にこれ印度式なるを見るべし。思ふに當時モンゴルの流風の深く西藏に入れりしこと疑なく、其の一端が繪畫の上に表はれ居るは、即ちデルヒ (Delhi) なるモンゴル皇帝の政治上の勢力の印度の北邊に及びたる反映なりとす。モンゴルの勢力のヒマラヤの山地に及びしことは、千六百五十年西藏政府が

バシャーール(Bashahr)國王と結べる條約に徴して明かに之を證すべく、之に關する文書はバシャーール並に西藏の兩文を載せたるもの亦フランクによりて發見せられたり。而して此文書によれば、バシャーール王ケハリシング(Kehari Singh) 西藏と争ひてモンゴル皇帝の援助を得、其の結果西藏よりグゲ(Guge)の大部分即ちシブキ(Slipki)よりワングト(Wangto)の橋迄讓與せられたるを知るべし。

ミールブル・カース(Mirpur Khas)

シンド(Sind)にてはコーセンス(Coinsens)氏の手に、ミールブル・カースの大スツーパーの發掘行はれたり。初めコーセンス氏の此の發掘を企つるや、スツーパーを覆へる土塚の荒廢甚しかりしかば、其の圍壁のありし儘に存せんこと覺束なかるべしとて、丘上より井坑を鑿ちて、直ちに柳室を求めんとしたる程なるに、なほ崩壞を免れたる圍壁も存在せしことゝて、發掘は豫想以上の効果を收めたり。圍壁の現

存せるものは其の下底部にして、プランは方形なり。柳室は其の中央に位し、地盤と水平にて、即ち丘頂より三十五呎にしてこゝに達すべし。柳室は基底十五呎平方、深さ一呎にして、内に圓形の石櫃あり。更に其の蓋を除けば内部の空虚はコップ形をなし、透明の瓶子又其の内に藏めらる。石櫃の内外には白沙ありて、瓶子の周圍の沙中よりは珊瑚の念珠、水晶黄金等の小珠、眞珠、數粒の穀物、十個の銅錢など出てたり。瓶子の内には銀製の箱にて包める金製の箱ありて、遺骨と屍灰は即ち其の中にあり。

圍壁は平滑なる煉瓦を疊みて之を作り、地盤より六呎の間は其の基底部に^{モルタンジ}して、周圍に剝形を繞らす。基底の上には基脚と大斗とを有する片蓋柱四本を立てたれば、兩隅の間の壁面は自ら五個の間に分れたる。隅々の片蓋柱は基脚は方形にして、上部は八角なり。五個の間は各大なる壁龕を備へ、上部の水垂には裝飾あり。五龕の中央の三個には各佛像一軀

を設置す。

スツーパーの西面は其の正面なりしものゝ如く、基底の構造他の三面と異なれり。其の中央に壁面を穿ちて三個の龕あり。臺座の遺存せるものあれば、此に安置せられたる佛像の存せしことあるべし。今其の佛像は見當なねど、中央の龕内に男装せる一軀の彫像の立てるあり。袋を腰間に掛け、左手を其の上に置き、右手には蓮華を持てり。是れ此のスツーパーを建立せる王者の像を寫せるものなるべし。

以上はマーション^{マーション}氏の印度最近の發掘の概略にして、なほ既記を経たるものゝ外バンダーカー氏 (Bhandarkar) がシールカル (Sikar) のハラスナート (Harasnañ) 寺より發見せる彫刻、マツラー (Mat-hura) 藝術に屬する彫刻、及びリー氏 (Ree) がヴィザンタム (Vizagapatam) のラーマチールタム (Ramachitram) にて行へる發掘等の記事あれども、今は之を略せり。又原論文には圖板數葉を挟みたれば、

其のビーター發掘の三家の詳細なる平面圖の如き、サリバーロール發見の佛像及び彫刻物の寫眞の如き、西藏バシール間の條約締結の光景を寫せる繪書の縮寫の如き、ミールブル・カースのスツーパーの圖の如き、何れも本文の説明と相俟て發する所甚だ多し。されば余輩が本誌の餘白を得て此の論文を紹介するに當り、若し其の圖板の一二を採て之を轉載することゝせば、或は讀者の利便に資すること多からんも、余輩の此の論文に於けるは、たゞ其の概要を傳ふるのみに過ぎざれば、亦之を略しつ。

(明治四十四年四月 池内 宏)